
Reallife Fairytale

神巫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R e a l l i f e F a i r y t a l e s

【Nコード】

N 2 7 0 3 A

【作者名】

神亜

【あらすじ】

お伽噺と日常生活をテーマに、恋愛の様々な「瞬間」を描くような連載にしたいと思っています。話によって主人公が変わってきます。

a m 7 : 2 0 のシンデレラ・1

a m 7 : 2 0 のシンデレラ・1

季節はめぐり、また春がやってきた。

少しずつ暖かくなり始めたある朝、私はいつもより早く家を出た。時計が指すのは7：10。普段より20分早い。

はあ、とひとつため息をついて歩き出す。教科書なんてほとんど入っていないのに、何故か重みを感じる鞆を担ぎなおした。

4月半ば、新しいクラスに少し戸惑いながら、それでも同じリズムを繰り返す毎日を過ごしている。けれど3年目となれば、それもそろそろ飽きてた。

期待に胸をふくらませて入学した高校。しかしその生活は大して中学と変わらなかった気がする。変わったのは制服と、鞆と、校舎。それから、周りの人々。

それ以外は変化がない。朝起きて学校へ行つて、部活がある日は部活に出て。家に帰ってご飯を食べて宿題をして、お気に入りのドラマを見るか本を読むかして眠る。

よく言えば平和な毎日。大きな問題もなく、順調に進んでいる人生だと言えるだろう。けれども、それに不満を持ち始めている私がいる。

それはやっぱり、我侭なのかな。当たり前前の生活ができることが幸

せなんだということはわかっている。けれどどうしても、それだけでは満たされない。

友達の話聞いても、みんな色々忙しそうだ。友達関係、家族、そして恋愛。大変そうに話す彼女達が、私にはとても羨ましかった。わざわざ苦労に憧れても仕方ないことは、私もわかっている。けれど、あまりに平凡に過ぎていく毎日は面白くない。もちろん、時々私は私だって友達のことと悩んだり、家族と喧嘩したりもする。けれども、それは大概些細なことで、すぐに解決するようなものばかりだ。こうして考えてみると、我ながら本当に恵まれた環境に生きているのだと思う。

苛められることもなく、両親は私に理解を示してくれている。

でも、どうしても足りない。何か日常生活に彩りを添えてくれる、スパイスのようなものが。

恋愛、という名のスパイスが。

高校生活に最も期待したのは、ずばりこれだった。

何事もなく、女友達と遊ぶだけで終わっていった中学時代。それはそれでとても楽しかったけれど、段々と恋に一喜一憂し始める友達を見ては、羨ましく思った。

恋には憧れていた。けれども、本気で好きになれた人はいなかった。というより、自分自身でブレーキをかけていた気がする。「自分には無理だ」と。

理由は簡単。自分に自信がないからだ。

私の友達には、何故かいつも可愛くて人気のある子が多かった。私も友達が可愛い子だとなんだか少し自慢になって嬉しかった。でもいつしか、そんな素直な感情は薄れていった。いつだって私の

隣の女の子は人気者。でも、私は？いつだって彼女達の影にいる気がしてならなかった。

一度卑屈になってしまうと、そこからなかなか抜け出せない。自信を持たなきゃ、なんて思っても、そんなに簡単にはいかない。

私の隣にいる女の子を好きになった男の子に、邪魔者扱いされたことだってあった。あからさまに何かされたわけではなかったけど、そんな風に思われていたことが私にはとてもショックだった。

私が自分の友達と仲良くすることがそんなにいけないことなの？

周りの視線が、男女含めて私の隣に注がれるたび、私の「自信」なんて崩れていった。

やがて、新しい希望を抱いて入学した高校。でも、現実はそう甘くない。事実、2年かけて変わったことなどほとんどない。

「自信」だって、取り戻せていない。むしろ広い世界で、ますます自分を押し殺すようになった。

友達と過ごす日々はいつだって楽しいもので、当たり前になんか日々を過ごしているだけいいのだろう。苛められてるわけでもなければ、成績だって悪いわけじゃない。

部活でも女の子達とは仲良くやってるし、上手いわけではないけどそれなりに楽しんでいる。

それでも、人間は手に入らないものほど憧れてしまうのか。映画や小説や漫画に影響されて、恋に対する憧れは増すばかりだった。

地元の駅まで大体15分。思っていたより準備が早く終わったため、ゆったりとした足取りで歩いていた。

今日から3日間、私は日直だった。新学期早々日直が回ってきてしまうのは、出席番号が早い人間の宿命だ。

<宇佐美楓>それが私の名前。

結構この名前は漢字が面倒くさい。小学校のときのお習字の時間にいつも苦勞させられた名前だ。そんなこといってもしかたないのだけれど。

あつたかくなってきたなあ・・・。

日差しが明るくなっていく空を見上げて、私は思った。

面倒な日直仕事のために早起きして、人もまばらな道を一人歩く。住宅街を抜けて、小さな公園を横目に過ぎる。人が増えてきた。コンビニやピザ屋なんかの前を通って、目指す駅はもう少し先。

去年の担任だったら、遅れても何も言われなかったのになあ。今年は厳しいし。遅れたら延長らしいしな。3日以上やるなんて嫌。

そんなどうでもいいことを考えながら歩いていると、ふと、満開の桜が目に入った。

今年は桜が咲くのが少し遅かった。新学期初めに学校に行くときには、まだ5分咲きくらいで。見ごろはいつかな、なんて考えながら歩いていた気がする。

私は桜が大好きだった。華やかな、淡いピンク色の花の集まり。たくましい大木に咲いているはずなのに、風に乗って花弁が舞う姿は胸が締め付けられるかのように切なく、儚い。

やっと満開になったんだ。そんな風に思って、一度立ち止まった。一本だけ、大きく咲いた桜。ちょうど駅から少し離れた、都立高校

のグラウンドのすぐ手前に咲いている。なんでこの一本だけ、ここに植わってるんだらうと、いつも思う。他の桜はグラウンド内に植わっているのに。

けれど、それは私にとって好都合だ。だって、朝の登校途中にゆっくりと、綺麗な桜を満喫できるのだから。

時間は7:20。駅まではもうあと2、3分で着ける。予定の電車までまだ余裕があることを確認して、私は満開の桜を見つめた。

綺麗・・・。

いつそのこと、このままここで桜を眺めながら一日を過ごしてしまいたい。春休みの生活に慣れた体は毎日重く、学校に行くことを楽しみだとは思えない。

逃げ出してしまいたい。そうしたら、この単調な日々も少しは崩れるかもしれないのに。

そんな風に思っても、本当にそんなことはできない。結局のところ、私は根が真面目らしい。学校をサボることは愚か、宿題を全くやっていかなかったり、ノー勉でテストを受けたりなんてことはできないのだ。

そろそろ行かないと。頭の中ではそう思っているのに、なかなか足が動かない。

その時だった。

サアッと風が吹いて。桜の花弁が一段と空に舞った。――
――それと同時に、私の頭に鈍い衝撃が走った。

「!？」

何かが当たった。たいした痛みではなかったが、突然のことと思わず驚いて振り返った。

「すみませんー!!」

そう言いながら、私のいる方向に一人の男の子が駆けてきた。

彼は、桜の木の根元に転がっているサッカーボールを拾って、私に向き直った。どうやら私の頭に当たったのはあのサッカーボールらしい。

「大丈夫ですか？」

私の顔を覗き込み、彼は聞いた。綺麗な二重まぶたが印象的な、人懐っこそうな顔立ち。けれども背が高く、子供と大人が絶妙に入り混じったような印象を受けた。

「あ、大丈夫です・・・」

おそらく、私はとても間抜けな表情をしていただろう。突然現実に取り戻された同様に、臆せず私に話しかけてきた彼にただ驚き、目をまるくして突っ立っていた。

人にボールをぶつけてきたのだから、謝って大丈夫かどうかを確認するのは当たり前だ。けれど元々男の子と話すこと自体苦手な私は、突然現れた彼に最低限度の返事をするだけで精一杯だった。

「本当にすみませんでした。それじゃあ」

もう一度謝って、彼はグラウンドに戻っていった。部活の朝練の最中なのだろう。

颯爽と現れて颯爽と去っていった彼とは対照的に、私はその場から動けなかった。彼が走り去っていった方向を見つめ続ける。

まるで、何かの魔法にかかったかのよう。どうしよう。動けない。

そんな風に立ち尽くしていると、私の鞆のポケットの中で携帯が震えた。

我に返って携帯を開く。同じクラスの、もう一人の日直の子からのメールだった。

<ごめん！！私今日の日直間に合わない！>

メールを見て、私ははっとした。左上に表示されている時間を確認する。

（嘘！電車間に合わないかも！？）

心の中で悲鳴をあげて、私は一目散に走り出した。

――――まるで、12時の鐘の音とともに駆け出した、シンデレラのように。

a m 7 : 2 0 のシンデレラ・2

a m 7 : 2 0 のシンデレラ・2

段々と人が集まり始め、教室の静寂は喧騒に変わっていった。

なんとか予定の電車で駆け込むことができ、無事に時間には間に合うことができた。けれど学校に着いた私は、なんだかすっかりぐったりしてしまっていた。

「おはよう楓！今日間に合わなくてごめんね！！」

たった今登校したもう一人の日直の子が、文庫本を開いて自分の椅子に寄りかかっている私のところまできた。まだそんなに仲が良いわけではない。でも、彼女自身は人と付き合うことに臆したりしないみたいだ。

「大丈夫だよ。たいした連絡もなかったし、日誌受け取っただけだから」

「本当ごめんね。明日は絶対来るから！」

すまなそうに手を合わせてから、彼女は他の友達のところへさつさと向かっていった。私はふうとため息をついて、先ほどまでの読書の続きをしようとした。

すると、すぐさま私の手から本が抜き取られた。

「オハヨー。」

言いながら本を抜き取ったのは、去年も同じクラスだった親友の裕美子だった。

「・・・オハヨ。どうでもいいけどいきなり本を取り上げないでくれる？」

私の机の脇に立っている彼女を見上げて、私は言った。見上げると言っても彼女は背が低い。私と立ち並ぶと10センチは差があるだろう。あまり見上げている感じはしない。

「朝から読書なんてさすがだねえ。何の本？」

「答えになってないんだけど」

まあいいじゃない、と笑って、裕美子は私をなだめた。

例によって、彼女もとても可愛い私の友達の一人だった。言動はなかなか勇ましいのだが、背が小さくてちょこちょこ動き回っているような印象を与える。

去年初めてクラスが一緒になり、なんとなく意気投合したのだ。趣味は全く違うのに、ここまで気が合うのも不思議だと思う。どうやら根本的なところで似ているらしい。

実際、話していて最も意見が合うのは彼女だと思う。最終的に行き着く結論が同じなのだ。

「またなんかのラブストーリー？」

私に本を返しながら、裕美子が聞いてきた。私はそれを受け取って鞆にしまいながら答えた。

「またって……。残念でした。今回はミステリーです」

彼女が「また」とつけるのも無理はない。恋に憧れすぎている私は、特に最近、恋愛ものの小説と映画にはまっていた。それも単純なくらいわかりやすい、王道純愛物に。

見るたびに私が「かつこいい」だの「あんな出会いがどっかにないか」だの言っているの、彼女はそろそろ呆れているみたいだ。

そんな裕美子自身は恋愛に関してとても淡泊だ。現在他校に付き合い始めた彼氏がいるが、既にデートも面倒くさがっている。彼氏を好きではないわけではない。実際アプローチをしかけたのは彼女

からだった。

ただ、裕美子の性格なのか、相手の「好き」が自分の「好き」よりも重くなってくると、やりにくいらしい。元々デートにも幻想を抱いていない。時々ろけることもあるが、基本的に恋愛に夢は見ないタイプだ。

・・・彼女いわく、私の性格は恋愛以外では冷たいとも言えるほどドライな人間らしいが。

「ねえ、それより何かあった？」

唐突に裕美子が聞いてきた。本を鞆に戻していた私の手が一瞬止まる。

「・・・なぜでしょうか？」

「いや、普段は朝いつつも眠そうなのになんか今日はそうでもないから。なんか面白いことでもあって目が覚めたのかと」

「あなたは私をなんだと思っているのよ」

確かに、私が眠そうにしているのはいつものことだ。もう一種の癖のようになっている、夜ベッドに早く入ろうと遅く入ろうと次の日の朝の状態はたいして変わらない。

最近では授業中にも容赦なく襲ってくる睡魔に、深刻に悩まされている。

鞆を机の横に戻して、顔を上げた。裕美子がどんな話なのかと興味深そうに私を見下ろす。私はにっこりと微笑んで言った。

「何も無いわよ」

「・・・はあ？」

私の答えに、裕美子は怪訝な表情になった。彼女が期待していた答えでないことは重々承知の上での答えだった。

「何もないって・・・。絶対嘘！！っていうかそれじゃあつまんないじゃない！！」

「人をネタにするな！」

「いつも自分は私をネタにしてるじゃない!!」

「でもたいした反応してくれないじゃない!」

勘がするどいのか、単なる当てずっぽうなのか。裕美子の反応に思わず私も声をあげる。教室のある一角、くだらない会話で騒ぐ私たちに周りの生徒の僅かな視線が注がれる。しかしそこは話題のつきない朝の教室、それはすぐに逸らされた。

確かに私は、よく彼女をネタにしている。自分に色恋の話題がなため、事あるごとに彼女と彼女の彼氏の話を持ち出してからかっている。けれど彼女自身が淡泊なので、なかなか期待する反応は返ってこない。

それでも時々、とても可愛い反応をする。どこまでも現実的な癖に、時おりふと、相手に対する愛おしさを漏らす。普段はわかりにくいのが、彼女が本気で今の彼氏を大切に思っていることが伝わるのだ。

そんな彼女を見てつくづく、私は彼女を可愛いと思う。顔だけでなく性格までもだ。男女問わず、彼女が親しまれ、人気になる意味がわかるような気がする。

けれども、そんな風に頭で思うたび、同時に心がどうしようもない羨望に飲み込まれる。一歩間違えば、私は彼女と友達でいられなくなるかもしれない。常に私の胸には、そんな不安が渦巻いている。

私の心境などお構いなしに、裕美子は更に私を問いただした。

「さあ!白状しなさい!」

ずいずいと効果音が聞こえてきそうな動きで、彼女は私に詰め寄ってきた。それに比例して、私はわずかに身を引く。

「だからっ!何でもないんだってば!!」

必死になって私は言った。

実際は、何でもないわけではない。朝のあの出来事が未だに頭から離れなくて、足が地に着いていないようなふわふわした状態が続いている。

別に裕美子に話したくないわけではない。ただ、なんとなく不安なのだ。言葉で説明しようとしても、何も伝わらないような気がしてあの時、桜の下で感じた感情をなんと表現したらいいのかわからないのだ。簡単に「一目惚れ」では片付けられない。でも、説明するのに適切な言葉が見つからないのだ。

そうして考えれば考えていくほど、段々、あの時間が夢のように感じてくる。すべて私の夢なのではないのか。ただの勘違いなのではないのか。段々と現実のことだと思えなくなってきた、一向に気持ちは落ち着かない。

いつの間にかトリップしていた私に、裕美子は仕方なさそうに一息ついた。

「・・・仕方ない。じゃ、放課後マックね」

「は？」

「じーっくり聞かせてもらっわよ。何が何でもね。」

おっと。先生来ちゃった」

「え！？ちよつと裕美子・・・！」

うろたえる私を無視して勝手に放課後の約束を取り付け、裕美子はさっさと自分の席に戻っていった。

てつきり諦めてくれると思ってたのに……。いつもいつも、
彼女にはかなわない。

結局、裕美子にすべてを話すことは避けられないみたいだ。

a m 7 : 2 0 のシンデレラ・3

a m 7 : 2 0 のシンデレラ・3

「それはまた・・・。ずいぶんドラマチックな出会いねえ」
夕方の賑わうマツクの片隅で、アイステイーを片手に全くドラマチックだなんて思ってたなさそうな口調で裕美子は言った。

放課後、約束どおり裕美子はマツクへと私を引きずってきた。四人がけのテーブルに二人で座り、裕美子はアイステイー、私はウーロン茶、そして真ん中にはワリカンのポテトを置いて会話は進んでいた。

放課後まで一日中、私は説明のために何とか適切な言葉を見つけることに授業時間を費やした。おかげで、久々に全く眠ることなく授業を受けることができた。頭に入っているかは別として。

けれども結局、説明している間にもどんどん記憶は美化されていき、現実と夢との境目に何度も迷うことになった。裕美子はそんな私の話を最後まで熱心に聞き、やがて呟いた。ドラマチックなんて、自分が最も使わないような言葉を使って。

「だから話にくかったの・・・。裕美子の全く信じない領域でしょ」

「まあね。でも、いくらなんでも楓の話を否定したりはしないわよ。にわかには信じがたいけどさ」

そう言って裕美子はアイステイーをすすった。私もそれにならってウーロン茶をすすする。

もちろん、本気で裕美子が私の話を否定するなんて思っただけはなかった。私の趣味やら何やらにはひどいとも言えるくらいズバズバ切り捨てていくこともあるが、真剣に話したときはきちんと聞いてくれる。そうじゃなければ、こんなに仲良くはやっていけないはずだ。ただ、恋愛に対してどこまでも現実的な彼女だから、私の感情を伝えきれぬ自信がなかったのだ。

実際、どれだけ伝わったのかは不安なところである。

「桜の下でサッカーボールにぶつかって一目惚れ、ねえ。よっぽどかっこいい人だったの？」

余程かっこよくなければ一目惚れなんてしない、と言い切ったこともある裕美子らしい質問だ。私は夢のように霞がかってきている記憶を探る。

「うん……。別に誰よりもずば抜けてかっこいいってわけではなかったと思うけど。ま、背が高くて、かっこいいというか割と可愛いよりの顔ってかんじだったかな」

「背が高くて可愛い、か。楓のタイプの問題だね」

「どういう意味よ？」

特に深い意味はないけどと答えて、裕美子はポテトに手を伸ばした。二本同時に口に含んで私を見る。

「それで。何か対策は？」

「対策？」

ポテトを口に含んだまま、器用に発せられた言葉に私は目を丸くした。対策？

そんな私をやっぱり、というような目で見て、裕美子はポテトを飲み込んだ。

「対策は対策よ。その彼とお近づきになるためのね」

お近づき！？

つていまだきそんな言葉つかわないでよ、なんて的外れなことがまず頭に浮かんだ。やがて正常に動き出したらしい思考回路でようやく言葉の意味を理解する。

「お近づきつて……。そんなの無理でしょ……。」

「無理じゃないわよ」

ネガティブな私の答えを裕美子は一刀両断した。

いや、確かに裕美子ならできるかもしれない。大体彼女だったら、声をかけて一言「メアド教えてください。」とでも言えば大概の男の子は喜んで応じるだろう。けれども、それは私には無理だ。うん。どう考えても無理。

けれどそんな私の感情、裕美子はお構いなしだ。更にポテトを手に取り、力説し始める。

「どうして無理なのよ？楓の地元の駅前にある高校だったら確かに北高でしょ。どこの高校の生徒かわかってるんだし、朝練のときなら他の生徒も少ないじゃない。ちよつと一人になった瞬間に呼んでアドレスと名前だけ教えてもらえばいいじゃない。」

「つて、他校の生徒が朝練中にお邪魔するわけにいかないじゃない」

「練習終わってちよつと人ごみから離れたところを、門の外からでも狙えばいいの」

「第一、私が聞いたつて教えてもらえないつて」

「どうして？」

それを聞かないでよ……。

それが正直な気持ちだった。そんな質問をされたら、嫌でも裕美子に嫉妬してしまう。自分と彼女を比べてしまい、ますます自信がなくなっていく。

結局、私は臆病なのだ。あんなに恋に恋焦がれていたはずなのに、いざ自分にチャンスが回ってくると尻込みしてしまう。私なんかでは上手くいかない。そんな思いはどんなに振り払おうとしても振り払えない。

裕美子の恋の話を聞きたびに、私は羨ましいと感じていた。私にも出会いがないかなあ、なんて、何度呟いたかわからない。そのたびに裕美子に諭され、時に呆れられ。

それなのに、ようやく訪れたチャンスに素直に飛びつくことができない。そして、嫌でも思い知らされる。私には出会いがなかったんじゃない、と。いくつものチャンスを、自分から手放していたのだと。

それはいつからだっただろう。もっと昔、それこそ小学生くらいのときは、もっと素直に恋ができた。好きな人に積極的なアプローチをかけられないところは変わらないが、幼いころは自分と友達を比べることなんてほとんどなかった気がする。あつたとしてもそれは深刻ではなく、最初から諦めるなんて絶対と断言していいほどなかった。

いつか、必ず私にも素敵な恋人が迎えに来てくれる。絵本で読んだシンデレラを、そんな風に素直に信じることができたあのころが懐かしい。

中学を経て、高校へ。願っていた王子様は現れず、自分はお伽噺のヒロインになれるような人間ではないということを思い知らされてきた。いつの間にか恋に臆病になり、最初の一步すら踏み出せなくなっている。

どうして、という裕美子の問いに、詳しく答えることはできなかった。感情を吐露してしまえば、きつと二度と修復できない。王子様だけでなく、大切な味方まで失いたくない。

「私の性格上ね。知らない人に声をかけるなんて無理」

一言、それだけ答えて、私はウーロン茶を飲み干した。

裏の意味はわからずともわずかに変化した私の声色には気づいたのか、裕美子はそれ以上追及しようとはしなかった。

けれどあの日以来、私の朝は早くなった。

日直が終わったにもかかわらず、私は7：10に家を出た。今まで予鈴がなる直前に教室に到着していた私が積極的に早起きできるようになったことに、最も驚いているのは私自身。

早起きして、今までより少しだけメイクに時間をかけて。わずか数分のためだけに、ここまでするようになってしまった自分がつくづく単純だと思う。

声をかけるのは無理。それは私の本心だ。けれどもあの日から、私の足は毎日あの時間、あの桜の下へ向かってしまう。声をかけることが無理だなんてことは重々承知。それでもどうしても、たった一目でいいから会いたいと思ってしまふのだ。一歩間違えばストーカーじゃない、なんて思いながらも止められなかった。慎重にグラウンドから見つからないように気を配って、桜の陰から砂の舞うグラウンドを見つめる。

そんな状態の私を、最初こそ発破をかけてきていた裕美子だったが、今では何も言わずに私が動き出せるようになるのを待っていてくれるようだ。

毎日、グラウンドを駆ける彼を眺めるのは約5分。長い時間留まっていれば他の部員や一般生徒に不審がられてしまうし、時間が経てば経つほど登校する人が増え、他校の生徒である私の居場所はなくなっていくからだ。授業中の5分はうんざりするほど長いのに、この桜の下で過ごす5分はあつという間に過ぎていく。

そしてそのまま学校に行けば、当然教室に着くのは早くなる。早く行ったところで仲のよい友達はまだきていないし、早起きの分眠たくなってくる。けれどそんな苦痛も、あの舞い散る桜の花弁の間から覗く彼の姿を一瞬でも見ることができるなら、引き換えにする価値があると思えた。

「よく言えば純情、悪く言えば奥手といつかなんといつか」
なんて、ある日のお昼時間に裕美子が呟くこともあった。いつも一緒に食べている他の3人の友達は、言葉の意味がわからずきょとんとしていた。

そんな風に朝の5分が日課になり数日経ったある朝、教室に入ってきた裕美子は一直線に私の元へ駆け寄ってきた。なんだかとても楽しそうに目を輝かせて。

「おはよ。いい知らせがあるの」

挨拶もそこそこに裕美子は切り出した。

「知らせって・・・」

「本当は昨日メールしようかと思ったんだけど。聞いたのが夜中だったのよね」

言いながら私の机の横に鞆を置いて、ブレザーを脱いだ。

昨日と同じように向かいに座る私は、そのわけがわからない表情のままその行動を見つめた。

「あー教室ってなんでこう暑いんだか・・・」なんて言って、私
が手渡した下敷きで仰ぎ始める。そうしてようやく裕美子は本題を
話し始めた。

「あのね、昨日の夜椎名とメールしてたんだけど」
椎名、というのは他校にいる裕美子の彼氏のことだ。

「椎名の友達にね、サッカー部の人がいるの。それで来週の日曜
日に試合があるんですって。さて、相手はこの高校でしよう？」
考えるまでもない。ここまで言われて全く予想がつかないほど私も
鈍くはない。

「つまり・・・相手は北高のサッカー部だと・・・」

「その通り。しかも会場は北高のグラウンドのほうですって」

なんだか頭がくらくらしてきた。あまりにもタイミングがいいと

どうか都合がいいというか。

裕美子のこの様子じゃあ、次に来る台詞はもちろん……

「ってなわけで、来週の日曜のプランは決定ね」

・・・やっぱり。

「ちよつと裕美子、本気で言ってるの？」

「当たり前じゃない。どうして？まさか行かないなんて言わないわよね？」

確認というよりは強制の意味を含めた裕美子の言い方に、思わず私は言葉を濁す。

裕美子はひとつため息をついた。

「ここで行かなくてどうするのよ！せつかく堂々と彼を見れる機会なのに。ってゆーか私がその人を見たいから行くの」

「そつちの都合！？」

すでに「どんな人なのかなー」なんてうきつき状態の裕美子。今度は私のため息をつく番だった。テンションの上がっている裕美子に声をかける。

「ねえ裕美子。普通に考えて、他校の私たちが見に行つてたらおかしいでしょ」

「私服で行けばわからないって。しかも椎名から聞いた話によると結構そいう人いるみたいよ。椎名のところのサッカー部って人気あるらしいし」

私の抗議なんかんでもないように裕美子はあっさりと言った。そして私に顔を近づける。

「・・・楓だつて本当は見たいんでしょ。彼を」

一瞬真面目になった瞳に、結局それ以上反論できなかった。

確かに、口では無理だ無理だと言っているけど、心の奥では行きたいと願っている自分がいる。

裕美子の言うとおり、これはまぎれもないチャンスだ。ようやく、一歩前に進むことができるかもしれない。

もとより断るなんて選択肢は存在していないのだ。別に行つたからといっていきなり告白する羽目になるわけでもない。こうなつたら答えるべき答えはひとつしかなかった。

「・・・わかった。行くよ」

「そうこなくっちゃ」

裕美子にはにっこりと微笑んだ。

さつきつから、何度鏡を覗いたかわからない。

早く来て欲しいような、でも来ないで欲しいような。複雑な思いのままあつという間に日曜日は訪れた。出かけるまであと30分。すでに服も髪もメイクもすませている。

けれどもどうしても気になつてしまふ。どこかおかしいところはないか。他の人たちから浮いてしまわないか。

何回見ても、結局もとの自分は変わらないのだから仕方ない。そう思っている気になつてしまふ。まあ結局メイクなんて自己満足なものなんだけれど。

とりあえず、スポーツ観戦ということで派手過ぎない格好を選んだ。シンプルな黒のカットソーにジーンズ。その上に今年購入した白いニットのロングコートを羽織って、首元にはシルバーのクロスネックレスを選んだ。

けれど、一番のポイントは足もとだった。シンプルにまとめた服の中で唯一、サッカーの試合に履いていっていいものか何度も迷った物。

つい3日前に買った、新しいパンプスだ。本来ならグラウンドで見るのだからスニーカーなどのほうがいいのだろう。けれどもこれはどうしても諦められなかった。

3日前、たまたま立ち寄った店で一目惚れした。その華奢ですらりとした形と、キラキラと上品に光るシルバーブルーが印象的なパンプス。目にして、思わず思ってしまった。「まるでガラスの靴のようだ」と。

もちろん、ガラスでできているものなんかではない。けれど、私の中にあるイメージに限りなく近く感じたのだ。シンデレラが魔法使いからガラスの靴を与えられたときの気分がわかるような気がするほどに。

昔、何かの本で読んだことがある。どこかの国では、「女の子は綺麗な靴を履きなさい」と言われるらしい。綺麗な靴は女の子を自然と素敵な場所に導いてくれるから、と。

この靴に出会ったとき、ガラスの靴のイメージと同時にこの言葉思い出した。もしこれを履いて彼を見に行ったら、何か良いことがあるかもしれない。この靴は私を彼のもとに連れて行ってくれるかもしれない……。あり得ないと思いつつ、そんな思いは拭えなかった。

落ち着かない気分のまま鏡の前を行ったりきたりしているうちに30分たった。靴を持って、新しいパンプスに足を通す。

深呼吸をひとつして、私は家を出た。

「なかなか……。すごいギャラリーね」

グラウンドの入り口で裕美子が呟いた。

確かに裕美子の言うとおりだった。大きな大会でもないのに関わらず、グラウンド周りには大勢の人がいた。

裕美子に聞いていた話によると、彼女の彼氏である椎名君の高校とこの北高校は昔からライバル関係にあるらしい。両校サッカー部はレベルが高く、大会でも毎年上位を狙ってくるほどだという。そんな2校の試合とあって、他校のサッカー部からの偵察がところどころに散らばっていた。おまけに、両校なかなかルックスのレベルが高い。おそらくそのせいだろう、他校の男子生徒に混じって同人数ほどの女の子が黄色い歓声を上げていた。

「ほんとに。こんなに盛り上がってるなんて珍しいわね」

「まあ周りはどうでもいいわ。それより楓のお目当てはどれ？」
言いながらさつさとグラウンドの奥へ進み、ゴール付近から試合を覗き始めた。選手のユニフォームによるとこっちは相手高のゴールだ。

私も試合を覗き、彼を探す。試合中選手はほぼ絶えず走り回り、二種類のユニフォームが交錯する中たった一人を探すのは少し困難だった。

「あ……」

思わず声を漏らす。一瞬にして視界に飛び込んできたその姿。

彼がいた。

10番のユニフォームを身に着け、声を張り上げながら走り回っている。一度目に付けば、もう見失うことはなかった。彼から視線

がはずせなかった。

「いた？どれ？」

裕美子が私の声に気づく。

「あれ。あの青のユニフォームの・・・ええと10番」

「10つて花形じゃない」

「そうなの？」

「確か。うちの兄が言ってた気がする」

人並みにサッカーに興味は持っているけれど、詳しいかといわれれば全然詳しくない。背番号のいいかわるいかまでは全く知らず、裕美子のその言葉にただただ驚いた。

そんなすごい人だったの・・・？

確かに、周りの女の子に注目してみれば彼が近くを走るたびに歓声があがる。相手高の制服の女の子が通りがけに「あの10番かっこよくない？」なんて呟くのも聞こえた。

「ふーん。結構かっこいいね。背高いし。おまけにサッカーが上手いとなればポイントは一気に上がるわね。騒がれるのも無理ないわ」

冷静に分析してみる裕美子。グラウンドを駆ける彼は声をあげ、静かな炎をたたえる瞳はゴールを見据えている。サラリとさわり心地のよさそうな髪は風に遊ばれ、汗が首をつたい光る。彼女が言うとおり、今現在グラウンドで走っている彼は最初の印象より更にかっこよかった。

数分間、そこに立つたまま試合を見ていた。今はまだ0-0の膠着状態。何度も惜しい場面と危ない場面が繰り返されるのをドキドキしながら見ていた。

そしてそのとき、ホイッスルが鳴った。選手がみんな、私たちの立っている側のゴール付近に集まってくる。私たちは邪魔になると思

って体を引いた。

コーナーキックだ。

コーナーを蹴りにきたのは彼だった。

それはつまり、私たちが立っている方向に走ってくることを意味した。左コーナー付近に立っていた私たちのほうへボールが転がされ、彼が走ってくる。私は真っ直ぐ彼を見た。

目が、合った。

心臓が跳ね上がった。音が耳まで聞こえてきそうなくらいで、喉が渇く。どうしよう。何か声をかけるべきか。でも、集中しなくていけない場面で迷惑はかけられない。それより彼はどんな反応をするだろう……。

そんな私の心配は、すべて骨折り損で終わることになった。

確かに目が合ったはず、けれど彼は何事もなかったようにすぐに視線を逸らしたのだ。

確かに、あり得ないことだろう。あの朝一言かわしたただけの私を覚えているなんて。私が絶世の美人であればまだしも、平均並みだとも思えない自分を覚えているなんて無理な話だ。

わかっていたはずだった。けれど、心の奥底ですっと願っていた。彼が覚えてくれていたら、と。

試合中私に気づいて、思い出してくれたら。声をかけてほしいとまでは言わない。ただほんの少しでも、私を見て表情を変えてくれたら。笑顔を向けてくれたら。

そう思っていた。

新しいパンプスに込めた願いはあっさりと壊された。彼はかけらも私を覚えていない。突きつけられた現実が、ただただ痛い。わかっていたはずけど。でもやっぱり。辛い。これ以上は無理だった。

「・・・ごめん裕美子。私、今日は帰るね」

「え！？なんで？まだ試合終わってないわよ。ってゆーかまだ前半・・・」

「ごめん。今日はこれ以上無理」

あまりにも私の表情がひどかったのだろう。裕美子はそれ以上何も言わずに、歩き始めた。私も何も言わずに後をついていった。私が突然帰ると言い出した理由を、裕美子がわかっているのかはわからない。でも何も言わずにいてくれるのが有難かった。今はきちんと説明できそうになから。

説明しようと思ったら、今にも泣き出しそうだった。

校門前で私たちは別れることになる。裕美子は駅へ、私は家へ。彼女は私の顔を覗き込んだ。

「大丈夫・・・？」

裕美子までもが悲痛な表情をしている。私はなんとか笑おうとして、でもそれは苦笑にしかならなかった。

「大丈夫。ごめんね、付き合ってもらったのに」

「それは気にしないでいいけど・・・」

「じゃ、また明日ね」

私がそう言つと、裕美子もそれにならった。「じゃあね」とだけ言つて駅に向かって歩き出す。私も家へ向かって歩き出した。

家に着いて鍵を開けた。

家に誰もいなかったので玄関に入って、靴を履いたままぐったりと座り込んだ。

「あー・・・痛かった・・・」

そんな風に呟きながら靴を脱ぐ。両足の踵は、見事に皮が剥けていた。

「あらら。こりや痛いはずだわ」

言葉が誰もいない家に空しく響く。その場に座り込んだまま足と靴を見比べていると、段々涙が溢れてきた。

帰り道、一人でとぼとぼ歩いてる間に、段々と両足を痛みが襲ってきた。新しいパンプスで歩き、立ち続けたせいだろう。もともとパンプスとは今までも相性がよくなくて、最初はいつも靴擦れに悩まされていた。そのため、今回はかなり用心してサイズを選んだはずだったのだが。結局今回もいつもと同じだった。

でも。

足以上に痛いところがある。

もはや、何に対して泣いているのかわからなかった。足に対してなのか。それとも、彼に対してなのか。

すべてが、元に戻った気がした。

魔法にかけられたような、夢見心地の日々が消えた。脱ぎ捨てられたパンプスを見つめる。グラウンドに立ち続けたせいでヒールに土がこびりついていた。

私は一人、自嘲気味に笑った。一日を振り返って、馬鹿みたいに思う。一人で舞い上がって、期待して……。

お城から逃げ帰ったシンデレラは、どんな気持ちだったのかな。

ようやく立ち上がって部屋に上がりながらそんなことを考える。シンデレラは幸せだったかな。だって彼女は王子様と言葉を交わし、ダンスをすることまでできたんだから。私は声をかけることすらおろか、彼に覚えてもらうことすらできなかったのだ。ガラスの靴を履いたまま帰ってきてしまった私は、この先王子様に見つけてもらうことなんてきつとできないだろう。

自分の部屋に辿りついて、ようやく一息つく。涙を拭くこともないままベッドに倒れこんだ。何もない天井を見つめながら、彼の表情を思い出す。試合中の真剣な表情、目が合ったときの反応、そして……一番最初に会ったとき、ボールをぶつけてしまった私に謝る姿。

目を閉じて、小さく息を吐いた。心の中が空っぽになったような空虚な気分が私を襲う。動き出す気になれない。けれど目を閉じてもなお彼を思い出してしまい、耐え切れずもう一度目を開けた。

「…………好きです」

誰もいない部屋で、ただ白だけの天井に向かって呟いた。行き場のない言葉が耳に響く。

まだ、たった一度しか言葉をかわしたこともないけれど。私のこ

とを覚えてもらうことすらできていないけど。名前も性格も知らない、学年だっけはつきりとわからない。それでも……。

「どうしてこんなに好きなんだろう……」

わからない。わからないけど、確実にわかっていることがある。私の気持ちは本物だということ。ようやく、出会えたのだ。本気で好きになれる人に。ようやく、憧れていた日々が訪れたのだ。

けれどあんなに憧れていたのにもかかわらず、簡単に飛び込むことができなくて。自分の情けなさ、不甲斐なさにはとほとほと呆れてしまう。涙は止まることなく流れ続けている。とにかく疲れた。朝からバタバタして、今までにないほど緊張して。シヨックをうけて靴擦れを引きずりながら帰宅して。精神的にも肉体的にも疲労きつた私は襲ってくる睡魔に耐え切れず、いつの間にか深い眠りに落ちてしまった。

次の日、いつも通りの時間に目覚めた私は時計を見ながら考え込んでしまった。早起きをしてグラウンドを眺めることが日課になっていた最近。けれど、今日はどうしたらいいのかわからなかった。彼を見たいと思う。けれど、昨日の出来事はまだ心に残っている。彼を見ればまた昨日のことを思い出してしまうだろう。へこんだ気持ちを背負ったまま学校に行くのは憂鬱でしかたがない。

けれどたとえ見ようと見まいと暗い気分はどうせ消せない。昨日から何につけてもやる気がおきなくて困っているのだ。それならばいつそ見に行つてしまおうか。案外、見てしまえばあっさりと立ち直れるかもしれない。

それが、諦めの思いになるか再チャレンジの気持ちになるかはわからないけれど。

悩んでいる時間が思ったよりも長かった。急いで準備を済ませて家を出る。少しだけ騒ぎ始めた心臓をなんとか落ち着かせようとしながら、暖かな日差しの中を一人歩いた。しかし努力もむなしく、高校に近づくにつれ心臓の音は増すばかり。別に向こうは私に気づかないんだからドキドキする必要なんかないのに、と思わず苦笑してしまう。全く、どうして私はこうなんだか。いちいち深く考えすぎてしまうのだ。

桜の色が変わり始めていた。花卉の散る量が増し、ところどころに鮮やかな緑色が覗き始める。

「もう散っちゃうんだ……」

桜が散る姿はとても綺麗で、同時にひどく切ない。今年は格別だ。なぜなら、もうすぐこの花卉の下で駆け回る彼を見れなくなるのだから。花吹雪の間から彼を覗くのがとても好きだったのに。

考え事をしながら歩くときはいつも驚いてしまう。自分のいる位置が思っていたよりも進んでいて、にもかかわらずそこに至るまでの周りの景色が全く目に入っていないのだ。今回も気づけばもう、北高校のグラウンド前まで来ていた。

昨日が試合だったにもかかわらず、北高校のサッカー部は今日も朝練をしていた。彼の姿を探す。けれどなかなか見つからなかった。(いないの……?)

ほっとしたような残念なような。とても複雑な思いのまま、グラウンドから目を離れた。振り返って散りゆく桜を見上げる。

もしも魔法使いがいるのなら、心から願いたい。

私に魔法をかけて。ガラスの靴を彼に届けて。彼を私のもとへつれてきて。

願うだけで、待ち続けるだけで王子様を手に入れたシンデレラのように、私にもチャンスをください。

そのとき、風が吹いた。

一瞬強い風が吹いて。荒れ狂う髪の毛を鞆を持っていない左手で押さえようとす。花卉が惜しげもなく舞い散って、まるで嵐のようだ。そしてそれと同時に、私の足に何かが触れる感触を感じた。

首だけで振り向いて見下ろした。サッカーボールだ。

「すみません！」

聞き覚えのある、声と台詞。反射的に体ごと振り向いた。前を見た私の瞳に飛び込んだのは、一番会いたいと願っていた人。

（嘘……）

強いデジャ・ヴに襲われて、眩暈がした。必死で自分を支えて、なんとかボールを拾う。今にも取り乱してしまいそうだった。心臓の鼓動は荒れ、喉が渴く。ボールを持っている手は今にも震えだしそうだった。

そんな私に気づかずに、彼は私のもとまできてボールを受け取っ

た。この間よりも、ずっと近い位置で。

「すみません」

もう一度謝りながら私を真っ直ぐ見た。そして、あれ？っという表情になる。

「・・・昨日、試合見に来てませんでした？」

唐突な質問に、私は言葉の意味をはつきりと理解できなかった。パニック状態の自分をなんとか制御し、慌てて質問に答える。

「あ、はい！見に来てました・・・」

彼の表情を真正面から見るのが精一杯で。返事は尻すばみになってしまった。けれどそんなことはお構いなしに、彼は私の返事にこりと微笑んだ。

「やつぱり。それともしかしてこの間も、ここでボールにぶつかりませんでした？」

「覚えてたんですか！？」

覚えててくれた・・・？

すると彼は少し苦笑して答えた。

「昨日は思い出せなかったんだけど。今のこの状況とそっくりなことがあったような気がして。今思い出しました」

昨日と、そして今朝の重い気分が一気に吹き飛ぶ。昨日は思い出してもらえなかった。けれども、彼の頭の片隅には残っていたのだ。それだけで十分嬉しかった。思わず私も笑顔になる。

「それじゃあ。二回も迷惑をかけてすみませんでした」

早く練習に戻らなければならぬのだろう。そう言って走り出そうとする。背中を向けた彼を見て、私はどうしようもない衝動に駆られた。

「あ、あの・・・！！」

走り出した彼を思わず呼び止める。さっきよりは少し離れた距離で、彼は振り向いた。なんだろうという表情の彼に、私は精一杯の

思いで言葉を押し出した。

「あの・・・！私、宇佐美楓っていいます・・・！」

落ち着いて考えれば、いきなり自己紹介されても困ることぐらい気づくだろう。けれどいっぱいいっぱいだった私はそんなことにも気づけなかった。そして名前のあと、何から言えばいいかわからず続きが紡げない。

けれどそんな私の様子に、彼は優しく笑っていた。

「・・・俺は富樫祐樹。ボールありがとう」

「・・・どういたしまして・・・！」

そう返した私の表情は、おそらく満面の笑みだっただろう。彼の優しい笑顔と言葉に、空っぽだった心が暖かく満たされていた。

走り去る彼の後姿を、そのままじつと見ていた。

もう一度魔法にかかる。桜は私の思いを乗せて、ボールはガラスの靴になる。彼を私のもとに呼び寄せる。

もう一度、舞踏会を開きましょう。

ドレスアップをして、ガラスの靴を履いて。

馬車に揺られて、あなたのもとへ。

12時の鐘はならないから。

もう二度と逃げ出したりはしないから。

タイムリミットのないダンスを、私と。

その場にいつまでも留まっていたい思いをなんとか振り切り、私は歩き出した。いつもの電車には乗れないかも。でも、どうせ早く着きすぎてしまうのだから関係ない。私は携帯を取り出して、無機質なディスプレイを覗いた。

画面に表示されていた時間は、7：20だった。

F i n .

白雪姫と物言わぬ鏡・1

送信者：本城千晶

Title：Re：

本文：私、孝也のこと好きなんだよね。

そんなわけだから彼女にしてくれない？

送信者：吉崎孝也

Title：Re：

本文：いいよ。俺でいいなら喜んで。

その日から私は孝也の彼女になった。

「今、なんて言った？」

通話中の携帯を握り締めて、私は言った。電話口の相手には当然顔が見えていないが、おそらくその言葉と声だけで彼は私の表情を感じることができただろう。眉間にしわを寄せて、引きつった私の顔を。案の定彼は一瞬言葉に詰まった。そして私の声色をうかがうかのように恐る恐る返事をした。

「だから・・・、来週の日曜も練習になったって・・・。」

「つまり、来週のデートもキャンセルだと？」

「その通りです」

小さな声で、でもきっぱりはつきりと彼は返事をした。私はわざとらしく盛大にため息をつく。

「これで何回目？それどころか最近ともに話しすらしてないじゃん・・・孝也」

私の返事に今度は彼――孝也がため息をついた。私のように盛大ではなかったが。おそらく彼の予想通りであったであろう私の反応だが、それでも孝也はどのように対処するべきか困り果てているようだ。苦し紛れに「話ぐらいいは、今もしてるじゃん」なんて的外れなセリフを返してくる。

「あのね。私が言ってるのはちゃんと会って話すこと。わかってんでしょ、そのくらい」

「わかってるけどさ。仕方ねえじゃん。試合近くて朝も夜も練習ばっかなんだから」

「そうだけど！でももう一ヶ月出掛けてないし朝も放課後も練習じゃ登下校も一緒にできないし。クラスだって違うんだから全然会う時間ないじゃん。大体校舎内じゃ周りがうるさくて会えても大して話なんかできないし」

私は溜め込んでいた不満をぐだぐだと吐き出した。確かに孝也がテニス部で頑張っていることは知っている。お世辞にも強いとはいえない難いうちの高校だからこそ自分達の代で少しでも記録を伸ばしたい、そう言って頑張っている孝也をずっと見てきたのだ。けれどあまりにもほったらかしにされている現状に素直に応援する気持ちよりもたまりこんだ不満のほうが大きかった。

孝也は孝也で、限界だったらしい。私の愚痴をさえぎって声を荒げた。狭い私の部屋に携帯からの孝也の声が響く。

「だからわかってるっつーの！でも仕方ないだろ！？夏の終わりに大会なんだよ！知ってんだろ！？」

鼓膜を直接刺激する孝也の大声に、一瞬ひるんだものの私も同じように音量を上げた。こんな夜に大声を出したら後でお母さんに怒られる。そうわかっていても抑えることなどできなかった。

「なんで孝也が逆切れするの！？約束破ってるのはそっちでしょ！！大会のことは知ってるけど約束ひとつくらい

守ってよ！この分じゃもうすぐ夏休みだってのにどうせ休み中も遊べないんですよ！」

最近まともなデートもしていない。おまけにもうすぐ恋人同士にはお待ちかねの夏休みのはずなのに、夏の終わりに大会、ということは休み中もまず練習だろう。更に学生の本分である宿題が重なることも考えれば遊びに行く暇なんて皆無だ。最悪なことに孝也の所属しているテニス部の顧問は私たち2年生の学年主任。テニス部では宿題の提出状況やテストの結果まですべてチェックされ、サボればどんなにテニスが上手くてもレギュラーから外されるらしい。たとえ顧問が学年主任でなくても、孝也の性格上どんなに忙しくても最低限の勉強はしなければ気がすまないだろうが。

それを知った上での私の抗議に、孝也は一層神経を苛立たせた。

「わかってんなら少しはこっちの事情も考えろよ！ああ、お察しの通り休み中もどうせ部活だよ練習だよ！！残念だけど遊んでる暇なんてないね！！」

「最っ低！！もう少し言い方って物があるでしょ！？もういい！！孝也のことなんか知らないから！！あんななんかより遥かに良い人見つけてやるんだから！！」

「あーあーどうぞご勝手に！！」

売り言葉に買い言葉状態で会話は決裂し、孝也は一方的に携帯を切った。ツーツーと無機質な機械音を発する携帯を耳から離し、私は座っていたベッドの枕に向かって携帯を投げつけた。（さすがに床に直接叩きつけることはできない）

一度上昇した怒りはおさまることなく、携帯を横にどかして私も

ベッドに寝転がった。

ったく……。人のことなんだと思っっているのよ。

彼氏彼女の関係になっってからやく2ヶ月。最初こそ孝也は部活の合間に無理矢理時間を作ってデートをしたり冷やかされるのを覚悟で学校で話したりもしてくれた。けれども最近ではそんなことは滅多になくなっている。2年生、ということで先輩後輩の両方から冷やかされることにうんざりした孝也は生徒が多い場所ではあまり話しかけてこなくなった。孝也の気持ちもわからないではない。最初は付き合っているという事実に満足し、たとえ学校で話せなくてもそれ以外場所で二人の時間が取ればいいと私も思っていた。けれども慌ただしい後輩獲得の部活勧誘が終わり、新たなメンバーを加えた部活で孝也は更に忙しくなった。先輩となったことと夏の大会が近づいてきたという両方の理由から、朝も放課後も真面目に練習に出ている。自分の練習だけでなく、後輩指導にまであたっているという。そんな状態の孝也は、たとえ休みが入っても部活の疲れ＋普段できていない勉強やその他色々なことでとにかく忙しかった。結果、私はほぼほったらかし状態。

もともと根が真面目な性格の孝也。だからこそ部活も勉強もできる限りしっかりこなそうとして自分の時間を削っている。孝也のそんな性格はわかってはいるし、むしろそんな孝也だからこそ好きになったのだ。本来なら文句を言うべきではなかった。

しかしこうもほったらかしにされていれば、段々そんな素直な気持ちも消えていく。部活で疲れている孝也はメールも最近ろくに返事を送ってくれない。部活にも入っていない、勉強だって真面目でなく塾にも行っていない。友達と遊ぶことは楽しいが、毎日毎日遊びに付き合ってくれるほど暇な友達も少ない。そんな風に暇を持て余している私にとって、孝也の目をみはる忙しさはほんの少し羨ま

しくもあつた。だからこそ、相手をしてもらえないことに苛立つてしまう。

「あーっ！！なんかイライラする！！」

孝也に対してか、それとも素直に彼を応援できない自分に対してか。とにかく自分がイライラしている、ということ以外わからない状態で、私はなんとか気分転換をしようとバスルームに向かおうとした。けれどもドアを開けた私はぎくりと立ち止まった。

・・・ドアを開けた私の部屋の前には、青筋を立てた母親が待ち構えていた。

白雪姫と物言わぬ鏡・2

あはははっという軽快な笑い声が、携帯を通して私の耳に届いた。電話の相手はクラスメイトの由香里。

「それで、大声で携帯に怒鳴ってたのを聞かれてお母様にまで怒られたってわけね」

いまだくすくすと笑いながら私に確認する。全く。こっちはそんなに笑ってられる余裕なんてないのに。

「あのね・・・笑い事じゃないんだけど」

むっとした声の私に、ごめんごめんと尚も半分笑いながら由香里は言った。

ひととおり母親に怒られた後、私はさっさとお風呂に入って部屋に戻った。ただでさえイライラとしていたときにガミガミ怒鳴られては余計に腹が立つ。おやすみなさいを言うこともなく部屋に入り、化粧水など最低限のことをしてから由香里に電話をかけた。

深夜0時。けれども由香里は3コール目ですぐに繋がった。もともと夜中に長電話なんて、私たちにとっては当たり前のことだ。ただ、今日はこれ以上母親に怒られることだけは避けなければ、と思いつつもより声のトーンは低めだが。

由香里は1年2年と同じクラスの親友だ。初めてのクラスで隣同士の席になり、やがてお互いとてもウマが合うことに気づいた。それ以来、ことあるごとに大騒ぎしながら毎日を一緒に過ごしてきたのだ。明るく所々大雑把で、常にポジティブシンキングな由香里は一緒にいてとても楽しいし気楽だった。実際、私が先ほどの孝也との電話のいきさつを話した後も、私を慰めたり孝也のフォローをし

たりする前に何よりもまず大笑いした。私としては不本意な反応だったが、これが由香里なので仕方がない。だいたい、しんみりと落ち込みたいのなら由香里に連絡などしない。私はおそらく、もともと笑い飛ばして欲しかったのだ。氣を楽にするために。

「にしても。吉崎君も忙しいのね。ってゆーか高2の夏にこんなに暇なのって私たちくらいじゃないの？」

茶化すように聞いてくる由香里。いつもなら私のその言葉に便乗して馬鹿な話をするのができるのに、今日はそんな気分じゃなかった。

「あのさ由香里……。私は相談をしたいんだけど」

ため息をつきながら私は言った。先ほどの孝也との電話の会話が思い出される。結局デートはキャンセル、休みの予定も白紙。いつもなら「しょうがないな」なんて思いながらも次の機会を待つことができたはずなのに。今回はなぜかショックが大きい。

由香里がようやく笑いを止めた。

「ああ笑った……。それで、結局どうするの？休命中練習の応援でも行く？」

「行けないって。校内で会うだけでも周りがからかうつてのに、練習の応援なんか行ったら先輩後輩にまでからかわれて後で余計に孝也に怒られるわよ」

「あ、そっか。んじゃどうするの？暇をもてあそぶの？」

そんなこと言われても……。どんなに私が会いたくても孝也は会えないのだ。スケジュール帳をベッドサイドにおいてある鞆から取り出して開いてみる。真っ白な夏休みを再確認して余計にむなしくなった。

「確かに暇だけださ……。だって孝也は部活で遊べないんだし。由香里遊ぼうよ」

「あ、私無理」

由香里はあっさりと私の誘いを断った。てっきりOKが返ってくる

ものだと思っていた私は拍子抜けした。

「え？なんで？なんかあるの？」

「うん。私夏休みから塾行くことになっちゃってさ。夏期講習」

「さつき暇だって言っただじゃん！」

「それは恋愛面に関してだけです」

わけのわからない理屈をこねながら由香里は言った。それにしても由香里が塾に行くことになっていたとは予想もしなかった。由香里は確かに成績が良いとは言い難いが、少なくとも私よりは遥かに頭がいい。そんな由香里が私よりも早く塾通いをするようになるとは。

「なんで塾？もう受験勉強？」

「受験勉強ってほどではないけど。親が行けってうるさいんだよね。まあ授業は個人でDVDにそって受けるだけで時間と曜日も好きなときに選べるシステムらしいからそこまで大変じゃなさそうだし。夏に試しに行ってみようかと思ってさ」

塾といえば中学のときに高校受験のために通ったようなものしか思いつかない。レベル別に分けられたクラスで、ひたすら勉強の日々。時には生徒よりも講師が熱くなったり、何人かの女生徒は受験を間近に控えても授業中の私語とくすくす笑いをやめなかった。

はつきり言って、塾は嫌いだった。自分の学校にはいないような苦手なタイプもうじゃうじゃいたし、最初は気が合う人もなかなか見つからなかった。ようやく何人かと親しくなつてからはまだマシだったものの、今度はそのせいで授業に集中しなくなった。塾での勉強が本当に役に立ったのかはわからない。

もともと、私は人と一緒に勉強するのはあまり得意ではないのだ。学校でもいつも授業中眠ってしまってるし（これは人が一緒でもそうでなくても変わらないが）テスト前に勉強会でもしようものならお喋りだけで時間は過ぎてしまう。塾でも友達ができてからはそうだった。

・・・とは言っても、一人だからといってバリバリ勉強するわけではないんだけど。

しかし、今回の由香里の話には興味があった。ただ単に時間が有り余っていて暇だから、という理由もひとつだったが、純粹に一度体験してみたいと思った。DVDでの個人授業。私の場合眠ってしまうこともあるだろうが、他の子と喋れない分、少しは勉強がはかどるかもしれない。そしてついこの間の一学期末テストの結果を思い出した。みごとに落胆した母の顔。もともと出来がよくない私を知ってるはずだけど、そんな母の表情を見たときにはひどく後悔した。もつと勉強しておけばよかった、と。そんな後悔は一度や二度ではない。毎回テスト後に「次こそは！」と決意するものの、それを実行できたことは一度もなかった。

そろそろホントに勉強したほうがいいかもしれないな・・・。

心の中で呟いた。上がるどころか下がっていく一方の成績。はっきり言って毎日遊んでいられる余裕なんて私にはないはずなのだ。そこまで考えて、私はようやく由香里に返事をした。

「ねえ、私もその塾行ってみたいんだけど」

「・・・今、なんと？」

私の言葉に、由香里が一瞬沈黙してから聞き返してきた。私はもう一度、はっきりと言った。

「だから、私もその塾行ってみたいって」

「千晶が！？本気で！？」

「そんなに驚かなくても・・・」

確かに、私が行きたいなんて言い出すことを由香里は思いもしなかっただろう。実際自分でも少しびっくりしている。いつもなら塾なんて絶対に行かない！と公言してはばからない私だったのに。

「どういう心境の変化？吉崎君と私以外に相手いないの？」

なんとも失礼な由香里の発言に、私は少しむっとして答えた。

「そういうわけじゃないけど。でも暇なのは事実だし。そろそろ勉強しないとやばいし。」

私の声色に由香里はようやく私の本気を読み取ったらしい。「冗談をやめて、真面目な声で私に確認する。」

「んじゃ、体験授業一緒に行く？来週私行く予定なんだけど」

「行く。連れてって」

即答した私。由香里の「OK」という言葉に、少しわくわくした。

「んじゃ詳しいことはまた明日以降にする？もう2時近くになつてきちゃってるし」

由香里に言われて、私は時計を確認した。確かに、あと7、8分ほどで2時になる。いつもは大体1時過ぎには終わっていたのに、どうやら今日は私の愚痴に時間をとったらしい。

「ホントだ。悪いね、つき合わせて」

とりあえず謝ってみた。由香里はさも気にしません、と言った感じで大丈夫、と答えた。

「じゃ、また明日。学校でね。1学期の授業も今週で終わりだー」
やったあ、とまだラストの週が終わっていないというのに喜ぶ由香里に、私は少し笑った。無邪気な由香里の笑い声に私の気分も軽くなる。結局、今夜の私にとって由香里に電話したことは正解だったみたいだ。

「そうだねー。ラストぐらいは授業中起きてるようにしなきゃ。んじゃ、おやすみ」

由香里からの「おやすみ」という返事を聞いて、私は携帯を切った。

電気を消して、ベッドに入って。ほんの数秒、枕元に置いていた携帯を開き妖しい光を放つ液晶画面を見つめていたが、結局孝也からのメールは来なかった。

白雪姫と物言わぬ鏡・3

「鏡よ鏡、この世で一番美しいのはだあれ？」

「それは、白雪姫でございます。」

魔女は魔法の鏡に問い、鏡は彼女に真実を告げた。

けれども、私の問いには応えてくれない。

「彼の気持ちを、私には教えてくれない――」

「……………ムカつく」

教室が女の子の笑い声で満たされるランチタイム。仲の良いグループ5人での食事中に、不満いっぱいの声で呟いた私の言葉は一斉に彼女達の視線を集めた。自分達の会話について文句を言われたと思ったのか、由香里以外の3人は訝しげな表情になっている。

唯一事情をわかつている由香里が、4人を代表して私に聞いた。予想はついているだろうが、一応私に理由を確認する。

「……………何が？」

「……………孝也」

ああ、とかなんだ、とかそんな呟きが3人の間から漏れる。とりあえず自分達に向けられた言葉ではないことに安堵したらしい。由香里はやっぱりね、という表情のため息をつく。

なんだかイマイチ相手にされていない気分になった私は、手にしていた箸をおいて4人に向かって叫んだ。

「あの電話から一週間、一度も連絡ないの！メールの一通でも送ってくればいいのにそれすらも！！いくら忙しいって言っても合間にメールくらい打てるでしょ！？明らかに故意でシカトしてるとしか思えない！！」

「だったら自分からメールしてみればいいじゃない」

私の愚痴に、絵美が律儀に答えた。（彼女はこのグループ内唯一のA型らしいA型人間だ。）他の3人は聞いているのかいないのか、黙々と食事を再開している。私は真剣に取り合ってくれない3人一瞥してから、絵美に向き直った。

「それは嫌。私が負けを認めたみたいじゃん」

「でもそんなに気になってるなら自分からメールするしかないじゃない」

絵美が言っていることは至極まともだ。誰だって考えなくてもわかる。私だってそのくらいわかっていた。けれども、意地っ張りな私はどうしてもそれができなかった。いつまで待っても連絡をくれない。さらにたまたまなのかそれとも孝也が故意にやっているのかはわからないが、校内ですれ違うことすらなかった。

「てゆうか、千晶が自分でもっと良い人見つけるって啖呵切ったんでしょ？だから連絡ないんじゃない？」

絵美の言葉に何も答えられなくなっていた私に、由香里が言った。

「そんなこと言ったの？」

「それじゃあ連絡もないわねえ」

先ほどまで私の話に反応を示さなかった二人が由香里の言葉に頷くさらに絵美までも二人に同意し、哀れむような呆れたような視線を私に向けてきた。

・・・我ながら、薄情な友達を持ったものだ。

昼休みも終わり、クラスがうとうとした空気に包まれる五時間目の数学。窓際後ろのラッキーな席に座っている私は、悔しいくらいに晴れ渡った空を除き見ていた。もちろん、教師の話は右から左へと抜けていく。

考えてみれば、私は孝也に一度もはっきりと「好きだ」と言われたことがない。メールで私が告白したときも、彼は「いいよ。」と答えただけではっきりとした「好き」という気持ちは聞いていないのだ。付き合い始めてからも、孝也は感情表現が得意ではないらしくはつきりとした気持ちを聞かせてくれたことはない。

・・・私ばかり好きみたいじゃん・・・。

毎晩毎晩、ベッドの上に放り投げた携帯を事あるごとに覗く。メールがきていないことがわかっていても、やっぱり見てしまう。そして変わりない液晶画面を見てため息をつくのだ。受信トレイには孝也の名前ではなく友達の名前だけが並んでいく。

孝也は気づいてるのかな。私が携帯を見るたびに、こんなに切ない気持ちになってるなんて。

多分気づいてないか。気づいてるならメールぐらい送ってくれてもいいじゃない。

ふと、白雪姫を思い出した。

白雪姫に出てくる魔女が持つ、魔法の鏡。どんな質問にも真実を答えてくれる、あの鏡が欲しいと思った。だって、そうすれば孝也の本当の気持ちだってわかるかもしれないのに。

どんなに願っても手に入らないものだとか知っている。所詮私の

手の中にあるのは、聞きたい言葉の一つも運んできてくれない役立たずの機械だけ。どんなにこれに向かって問うてみても、誰も答えをくれない。

考えれば考えるほど、気持ちは落ち込んできた。午後の日差しは暖かく、教師の声はすでに子守唄に近い。

ネガティブに走っていく思考を頭の隅に押しやり、私は眠りにつくことにきめた。

「見事なまでの爆睡ぶりね……。おはよう」

帰る準備を万端に整えた由香里が呆れたように私のもとへきた。

結局5時間目の授業の途中から眠り始めた私はそのまま6時間目まで見事に寝てしまった。6時間目の日本史の担当は生徒にとことん無関心な教師で、休み時間から継続で眠っている私にも全く注意を払わなかったらしい。おかげで6時間目終了のチャイムが聞こえたとき、私はてっきり5時間目が終了したものだばかり思っていた。

「自分でもびっくりしたよ。こんなに寝るつもりじゃなかったんだけど」

夏休み前最後の授業がある週くらいまともに起きていようと思った決意はどこにいったのか。もとよりあんな言葉は電話口でとっさに思いついたものでしかないのだけれど。

椅子から立ち上がって伸びをして、私も帰る準備を始めた。すると、掃除用の箒を片手に持った絵美が私たちに近づいてきた。

「そういえば、今日から二人塾なんだって？」

私たちは二人は頷いた。

「そうそう。一昨日体験行つてね。まあ簡単にシステムとか説明

されて一回授業受けただけなんだけど、結構雰囲気とかよくてとりあえずはじめてみることにしたんだ」

由香里が興味津々といった感じの絵美に説明した。

「へえ〜。でもDVDで授業ってどうやるの？」

「部屋がブースに仕切られてて、そこに机とパソコンがあるの。んで、ヘッドフォンつけてそれぞれDVDに映ってる先生の授業を聞きながら進めていくって感じかな」

絵美の質問に、今度は私が答えた。

「なるほど。なんか面白そうだね。でもわかんないことがあつたらどうするの？DVDじゃ聞けないし」

更に疑問を投げかけてくる絵美。しかし答えようとした私の口は開いたまま一瞬停止し、「・・・どうするんだっけ？」となんとも間抜けな言葉が出てきた。そんな私に呆れてため息をついた由香里が私の代わりに説明する。

「ちゃんとチューターって呼ばれる人たちがいるの。まあバイトでやってる人とかも多いらしいんだけど。ちゃんと勉強できる人たちを選べるらしいからその人たちに聞けば教えてくれるんだって」

「あ、そうそう。そんな人たちがいるんだっけ」

「・・・千晶、あんた話聞いてなかったの？」

「あははー」

私と由香里のやり取りに、絵美はくすくすと笑った。話は聞いていたはずだけれど、私の記憶力が曖昧なのはいつものことだ。呆れている由香里も笑っている絵美もちやんとそれを承知している。

「それじゃあ頑張つてね」

につこりと笑って言った絵美に二人で笑みを返して、私たちは教室を出た。

学校近くの駅から電車に乗って新宿まで出た。地下鉄の東口から

地上に出て、少し歩けばそこに私たちの塾はあった。

さほど大きくはないけれど小綺麗なビルの一階から三階がこの塾のフロアだ。自動ドアをくぐりぬけて中に入ると、事務作業をしているスタッフのお姉さんやチューターの人たちが顔を上げた。「こんにちわー」とにぎやかな挨拶に迎えられる。

中に入り、由香里が事務のデスク前からスタッフに声をかけた。

「こんにちわ。今日から入塾することになった橘と本城ですけど・
・」

「あ、はい。ではこちらに来てください。最初にチューターをご紹介しますから」

明るい笑顔と声で、そう言われ、奥の小さな部屋に案内された。少し大きめの机と椅子が五つ。壁にはホワイトボードがかかっている。チューターが時々ここで生徒に説明するのだらうと思った。

「すぐに担当の者が来ますので、少しお待ちください」
そう言つてスタッフのお姉さんは出て行った。

「チューターの紹介つて？」

お姉さんが出て行ったのを確認してから、私は由香里に聞いた。由香里は私を見て少し驚いたような表情を見せた。

「つて、あんたそれも覚えてないの？説明されたじゃん」

「・・・そうだっけ？」

本格的に私の記憶力はやばいのかもれない。塾に入るより記憶術でもはじめたほうがいいのかも。

「教えてもらうのは誰にでも聞けるけど、それとは別に生徒にそれぞれ担当のチューターが一人つくのよ。月に一回塾で受けるテストとかの結果を見て、私たちにアドバイスしてくれる人が。で、私たちは一緒に入ったから二人に一人、担当のチューターさんがつくつて言われたじゃん」

「へえ」

「へえ〜ってあんだね・・・」

やれやれと言った感じの由香里に私は笑ってごまかすしかなかった。
ん〜見事に記憶にないわ。

由香里の説明を聞いた後、どんな人が来るのかと期待と不安が半分ずつ入り混じった感情が込み上げてきた。とりあえず、話しやすくして優しい人がいいな。あんまりズバズバ言われるとへこむし。私なんか絶対毎回マイナス点を言われるだろうし。

そんな考えをめぐらせていると、突然かちやりとドアが開かれる音がした。

白雪姫と物言わぬ鏡・4

「もうね、すっごい素敵だったの！かつこよかったの！！」

朝のざわめく教室にまぎれた私の声。廊下側一番後ろという私と同じくなんともラッキーな席を引き当て同じくエンジョイしている由香里を真ん中に、私たち5人は集まっていた。予鈴は既に鳴っているが、私たちの担任は本鈴になるまでは教室に來ない。なので私たちも他のクラスメイトも席に戻る気配はなかった。

「もうホントに素敵！！織田裕二とレオナルド・ディカプリオとウォンビンをして3で割ってみましたって感じ！！」

「滅茶苦茶な組み合わせね・・・」

「年齢も国籍もバラバラ」

「イメージできないね・・・」

私の言葉に由香里はため息をつき、残りの3人は絶妙なコンビネーションでそれぞれコメントを発した。先の二人は呆れ、ラストの絵美だけは苦笑交じりだった。

けれども私はそんなことも構いなしだった。とにかく昨日からテンションは上がりっぱなし。由香里は私を止めることを放棄し、野放し状態の私は3人にひたすら事細かに昨日の出来事を説明し始めた。

「こんにちは」

さわやか度100%の笑顔ととろけるような甘い声、部屋に入ってきたのはすりとした長身のとにかくモデルのようにかっこいい人だった。思わず見入ってしまい、「こんにちはー」と愛想よく挨拶を返す由香里と対照的に私は挨拶するタイミングを逃してしまっ

た。

「初めまして。二人のチューターを担当します。柏です」

限りなくさわやかに自己紹介をして柏さんは私たち二人の前に座った。手に持っていたブルーのファイルを机に置いて、その上で彼は手を組み合わせる。そんな一連の動作さえもまるで決められていた動作のように完璧で見とれてしまった。やがて私たちも順に名前を告げると、柏さんは私たちに好きな質問をすることを許した。早速私は質問した。

「柏さんは大学生ですか？」

「うん。この近くにある大学の三年。ちなみに経済学部ね」

「大学の名前は？」

「それは秘密。あんまり簡単に教えるなっで塾長に言われてるんだ」

「得意科目は？」

「数学・・と言いたところだけど実は英語。経済学部つつつても普通のとちよつと違つて国際専門コースだから」

「好きなアーティストとかいますか？」

「今も昔もB・Zが好きだね。あと洋楽もよく聞くよ」

「趣味は？」

「映画見たり、あとバスケ。見るのもやるのも両方好きだな」

「それで現在彼女はいますか？」

「今のところはフリーだね」

矢継ぎ早の私の質問に、柏さんは嫌な顔せずひとつひとつ答えてくれた。その間、由香里は私の隣で完全に呆れていた。けれど私はそんなこと気にせず、とにかく柏さんに話しかけた。挨拶をし損ねた分を埋め合わせようとするかのようにとにかく質問をし続けた。

「はい、ストップ。そろそろ質問タイムは終わりにしていいかな」私の勢いに笑いながら、柏さんは時計を見て待ったをかけた。由香里が小さく「すみません、この子限度つてものがなくて・・・」

とまるで母親のように謝るので私が抗議の声をあげると、「まるで漫才コンビみたいだな」と柏さんは更に笑った。そして机の上に置いていたファイルから何枚か資料をだして、私たちに渡した。

塾のシステムなどは既に女性スタッフから聞いていたので、やることといえば渡された資料を見ながら最低限の確認をすることだった。塾のスケジュールの組み方や毎月行われるテストのことなど、依然聞いたものを再び柏さんが説明する間、私は普段の学校の授業の数十倍は真剣に話を聞いていたと思う。

確認が終わるとそれ以上特にやることもなく、さっさと授業に行くことになった。3人一緒に立ち上がり部屋を出ようとすると、柏さんは最後に私たち二人を見てもう一度にこりと笑顔を作った。

「授業形態が学校とは全然違うから最初は眠くなったりもするだろうけど、そのうち慣れるから。授業でわからないところがあったらなんでも聞いて。・・・できれば英語だけがいいんだけどね」

悪戯っぽく笑って付け加え、私たちを部屋の外へと促した。もう一度「頑張ってね」という声を受けて、私たち二人はそれぞれ授業を受けるブースへ向かった。

そしてその帰り道、私はひたすら柏さんについて由香里に語り続けていた。彼女によると私は一目惚れの脅威を延々と話し続けたという。テンションがあがりすぎて自分ではあまり覚えていないのだが。

そして現在にいたる。

私は壁に寄りかかってひたすら昨日の出来事を説明し、座っている由香里を挟んで話を聞いている3人はまさに昨日の由香里の二の舞を踏んでいた。由香里は「耳にタコができる」なんて言って完全に私をシカト状態。けれども話しているうちに昨日のテンションが戻ってきた私は、由香里の冷やかな反応と3人の呆れた顔や苦笑す

る表情が同時に驚きと怖れと焦りに変わったことに気づかなかった。
気づくべきだった。

私の寄りかかっている壁の後ろは廊下、おまけに私のすぐ横で教室のドアが開け放されていたことに。

テンションのあがった私の声が廊下に筒抜け状態ということに。

・・・感情の読みとれない表情のまま、孝也がそこに立っていることに。

「・・・千晶。千晶！」

うるたえるような声で絵美が私を呼び、ようやく私は話をやめ我に返った。全員の表情が変わり、私と私の横を交互に見つめたことに気づき私も振り返ってみた。テンションが一気に下がって、体から熱が退いていく。

「・・・孝也」

私の呟きが聞こえたのか聞こえなかったのか。孝也は無言でその場を立ち去った。鞆を持ったままの孝也は登校してきてたまたま通りかかっただけなのだろうか。それとも私に用があって朝一番にこの教室を覗いたのだろうか。今となってはもうわからなかった。

どこから聞かれていたのだろうか。いや、おそらくそんなことは考えても仕方ないだろう。先ほどもまでの自分を思い返してみると、どこから聞かれても状況はよくならないと感じた。孝也のことを完全に忘れ、ひたすら柏さんを賛美する言葉しか発していなかったのだから。

でも後悔と同時に、イライラとした別の感情も沸きあがってきた。

一週間以上連絡もなし、あの夜の喧嘩のフォローもしてくれなくて、どうして今更突然教室に来たりしたんだろう。いや、たまたま通りがかっただけなのかもしれないけれど、そうだとしてもどうしてなにも言わずに言ってしまったのだろう。私の話が聞こえていたのなら、怒りでも嫉妬でも呆れでもなんでもいいから反応を示してほしかった。全く無関心のような孝也のあの背中が、どんな反応よりもむかついて、それでいて辛かった。

「追いかけたほうがいいんじゃない？」

先ほどとはうって変わって真剣な顔になっている由香里が私に言う。でも私は動かなかった。いつだって追いかけるばかりなんて、もう嫌だ。

「・・・いい。別に今更」

明らかに意地を張っている私の表情と声に、全員が途方にくれたような表情を見せる。絵美が沈黙を破ろうとしたまさにそのとき、チャイムが鳴り、ぴったりのタイミングで担任教師が教室に入ってきた。

「早く席に戻ろう」

それだけ言って、私は由香里の席から直線距離にして一番遠い窓際一番後ろの席へ向かった。

白雪姫と物言わぬ鏡・5

あれから、更に一週間が過ぎた。

授業がすべて終わっても、終業式までは一週間以上の期間があった。そのうち半分は家庭学習日という名の休日。しかし帰宅部の私にとっては夏休みが始まったも同然だった。登校日もロングホームルームのみで一時間程度で帰れる。部活がない私や由香里は炎天下の中、普段の倍以上の時間を与えられて苦しむもしくは喜ぶ運動部を横目にさっさと下校していた。

孝也とはあの朝以来まともに顔を会わしていない。学校に来る日数が減ったというのも原因のひとつではある。けれどもそれだけではないだろう。

私や由香里は最寄り駅の関係で、常に下校時にはテニスコートのすぐ横を通っていかなくてはならない。そんな時、毎回私は、無意識にコート内に目をやってしまう。そして自分で後悔する。私のことなんかまるで気にかけていないかのように練習に打ち込む孝也を見て。マネージャーと親しげに打ち合わせをしている孝也を見て。一年生の女の子の三人組に声をかけられている孝也を見て、結局いつも私だけ一人でぐるぐると暴れているようで無性に悔しかった。

そして終業式を翌日に控えたある日の登校日。夏休みに学校で行われるという夏期講習の出欠表を提出するためだけに登校したかのような日だった。その日の放課後、いつものように私と由香里とともにコート脇をしゃべりながら歩いていた。たまたま少し遠くで練習している絵美達3人を見つけて軽く手を振ってみる。すると「美人だけど性格が悪い」という噂のバトン部部长に睨まれてしまった。その反応に肩をすくめ、バトン部から目を逸らすとその拍子にテニ

スコートに視線が移った。

振り向いた孝也と目が、合った。

まともに目が合ったのは何日ぶりだろうか、と本気で思った。けれども私が何か反応を見せる前に、孝也はさつとその目を逸らしてしまった。孝也の行動になんとも言えない気持ちが溢れる。もはや悲しいとか悔しいとか、そんな感情ではなかった。自分が大きなショックを受けなかったことに驚きながら、ただ妙に納得してしまったというか当然だろうというような気持ちだった。

一瞬の出来事に由香里は気づかなかったのか、「どうした？」なんてのんきに声をかけてきた。「別にっ」と軽く笑って歩く速度を速める。

「早く行こ。さつさと塾に行って柏さんに会わなきゃ！」

私の言葉に由香里はまたため息をつく。

「今日も行くの？？たく、頑張るわねえ」

彼女の言葉が示すとおり、初めて柏さんに会ったときから私はほぼ毎日塾に通っている。けれどもその目当ては授業ではなくもちろん柏さんに会うことだった。つまり由香里の「頑張るわねえ」は私の勉強っぷりではなく、懲りずに柏さんに近づこうとしている行動に対してなのだろう。塾のシステムは授業を受ける日にちと時間を授業ごとに自分で選べるものなので、私は連続で授業をとっていた。

「まあね。そろそろ一歩前進したいところなんだけど・・・」

そんなことを呟きながらも、まだ頭の中には孝也の姿が残っていた。結局、柏さんに近づこうとしていることだって孝也への反発でしかないのだ。一歩前進だなんて、所詮言葉の上だけのものだ。柏さんにはこの上なく失礼だと思う。けれども、こうでもしていないと気持ちは落ちていくばかりなのだ。毎日柏さんに会いに塾に行く

ことは、最初こそ本気で柏さんをつこいと思えば本気で好きになりそうだと思ったが、今では単なる意地でしかなかった。その証拠に、毎日毎日塾帰りはどつとテンションが落ちてしまう。私を責めるように押し寄せる柏さんへの罪悪感と、そして孝也への罪悪感。孝也が好きだ。でも柏さんと一緒にいると、ひとときの安らぎを与えられたような気分になる。嫉妬したりイライラしたり悔しがったり、そんな私が遠くに消えて、ただ笑っているだけでよくなる。毎日孝也を思いながらも、この時間だけは柏さんの癒しを求める。孝也を傷つけ、柏さんを利用して、私はいったい何がしたいのだろう。

それでも、私は今日も塾へ向かう。

いつも通り、授業後に柏さんのもとへ行った。授業で行った範囲について質問する。もともと英語が得意じゃない（というか得意な科目なんてない）私には、柏さんのもとへ行く口実なんて探さなくても見つかるものだった。

「お疲れ。今日はどこ？」

そんな風に笑いながら、柏さんは私に付き合ってくれる。毎日毎日基本的な部分を質問にきておまけに覚えが悪い私に対しても、彼はいつも笑顔で呆れることなく教えてくれた。たまたま来ているチューターが少なく、来ていたチューターも買出しに行ったり個別部屋で他の生徒に教えていたりするらしく、事務には人がほとんどいなかった。いるのは書類整理をしている女の事務員とバイトではない専属のチューター2人（熱心に何かを話し合っている、というか議論している。けれど時おり聞こえる内容はたいしたことなさそうなものだった）、それから新人らしいバイトのチューター1人と柏さんだけだった。人が少なく、柏さんの机が現在事務にいる人たちとは少し離れていたの、柏さんはさほど周りを気にしないで説明

し始めた。

「……どうしてもわからない場合はこの間にb e動詞を入れてみるんだ。そうして訳してみれば……」

優しく甘い声が響き、男の人にしてはとても綺麗な長い指が私のテキストをなぞる。ドキドキするくらい完璧な人。説明を聞きながらすっかり見とれてしまいそうで少し慌てた。けれどそんな瞬間さえも、とても心地よかった。この瞬間だけは孝也のことを忘れてしまいそうになる。後になって自己嫌悪に陥ることはわかっていた。けれど、日に日に感覚が麻痺していく。少しずつ、孝也を思い出す瞬間が減っていつている。確実に。

「ありがとうございます。やっと理解できましたよ。さすが柏さん！」

ひととおり説明を聞いて、鈍い私の思考にも柏さんの言葉が刻まれてから、私は立ち上がった。柏さんもそれに合わせて立ち上がる。

「俺のおかげと言うよりは本城さんの頑張りだよ。毎日通つてきてホントによくやつてる」

「ありがとうございます！」

褒められたことにくすぐったいような感覚を覚えた。こんな風の人に言ってもらうのは久しぶりな気がした。頭を上げた私は満面の笑みだっただろう。

「でも無理はしないほうがいい。あんまり焦らなくてもまだ2年なんだし」

本気で気遣ってくれている、それが伝わってきた。きっと他の生徒にも同じことを言っているのだろう。わかっているはずなのに、それでもとても嬉しかった。自分の単純さに多少呆れつつ、でも今は素直に柏さんの言葉を受け取っておくことにした。

「大丈夫です。柏さんに会うためなら毎日通うくらい!」

「なんだ。勉強じゃないのか」

私の返事に柏さんは大笑いした。完璧冗談だと思われるな、と私は思った。とはいえ、言った私にも本気なのか冗談なのかいまいち区別が付けられなかったが。渦巻く暗い気持ちにまたせりあがってきそうになつて、それを振り払うかのように私はまた軽い口調で言った。

「本当ですよ。私は勉強じゃなくて柏さんに会いにきてるんですから」

「ふーん」

なおも笑いながら柏さんは言った。迷惑がっているようには見えなかったので、少なくとも嫌われてはいないかなと私は感じた。

すると、ふと柏さんが笑うのをやめた。

微笑んではいる。けれど、さっきとは違う種類の笑みだった。なんとというか、先ほどまでのさわやかな印象ではなく、何かを感じさせるような微笑が口元に浮かんでいた。

「それじゃあさ」

声は変わらず、甘い。表情の変化と耳に届くいつもの声に縛られて動けなかった。ざわざわと胸の奥が騒いだ。

「今度は塾以外で遊びに行ってみる?」

告げられた言葉自体は、重く感じないものだった。けれどもその表情と口調は、私の鼓動を大きく波打たせるのに十分だった。

「……何言ってるんですか」

かろうじて絞り出した声。普段と変わらないように、動揺を悟られないようにと、努めて言った。けれど私の口調を柏さんがどんな風に受けとったかは読み取れなかった。柏さんの笑みが、いつもの

ものに戻った。

「なんてね。冗談」

嘘だ、と咄嗟に言いそうになった。言葉を飲み込んで、私もいつものように笑って言い返した。

「そんなのわかってますよー。私なんか誘ったってなんの得にもなりませんもん」

あははっと笑った。けれど、その喉はカラカラだった。

突然の柏さんの変化に戸惑った。でも同時に、その誘いに即答しそつになった自分がいた。彼の言葉に乘ろうとしたのだ、私は。冗談だと言われたときも、そんなはずがないと確信していた。冗談で流さず、そのまま連れて行ってほしいと願う自分がいた。そしてそんな自分に、私は驚いている。

彼が何を思っで私を誘ったのかはわからない。ただ、そこには冗談なんて含まれていなかった。それだけは確信が持てた。だからこそ、彼の狙いは全くわからない。

けれども、柏さんの真意など関係なしに、流されそうになった自分がいた。あの瞬間、私の中から孝也は完全に姿を消した。残っていた罪悪感、後ろめたさや悔しさ、孝也に関するものが一切私のなかに感じられなかった。

私は柏さんに何を求めていた？孝也に見放されて、ただ癒されるために利用していただけじゃなかったのか。それとも、いつの間にか私は本気でこの人に惹かれ始めていたのか。自分で思っていた以上に、私のなかでこの人が占める割合が多くなっていたのか。

この人は、毒リンゴだ。甘美な香りで私を誘惑し、みずみずしくさわやかなその味で私を侵食する。食べてはいけないもの。けれど人は、いけないと思うことにほど強い好奇心を抱いてしまう。そして、一口口にすれば、あとは簡単だ。ただ堕ちていくだけ。

私にはガラスの棺はない。たくさんの花を添えて美しく葬ってく

れ、涙を流してくれる七人の小人も。そしてクライマックスで、私を優しいキスで目覚めさせてくれるはずの、王子も。清らかで美しい白雪姫とは違う、ずるくて我侭で汚い私は与えられた毒に苦しむしかない。とろりとした甘い毒は、私をじわじわと捕えていく。

治療方法はあるのか。

おそらく最も簡単な方法は。

ただ身を任せること。

――体を侵す甘い毒と、リンゴを受け入れてしまうことなのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2703a/>

Reallife Fairytales

2010年10月9日21時29分発行